

# 西尾市史だより

N I S H I O

第6号 2020.2.1



写真1: タケオオツクツク♂ 左背面 右腹面



写真2: タケオオツクツク♂ 体長約50mm (戸田尚希撮影)

## 外来種タケオオツクツクを 西尾市で確認

タケオオツクツクは体長約50mm、クマゼミと同程度の大型のセミです。今から三年あまり前の二〇一六年八月、日本で初めて埼玉県川口市で発見されました。そして中国大陸東部に広く分布する *Platylomia pieli* KATO というセミであることがわかり、寄主植物がタケであることからタケオオツクツクと命名されました。埼玉県ではその後の調査によって、川口市に広く分布しているほか、さいたま市にも広がっていることがわかりました。その後、二〇一八年夏には、神奈川県川崎市でも一個体が発見されました。そして二〇一九年夏に全国各地域目の記録として西尾市で発見されたのです。

西尾市の個体群は、西浅井町から発見されました。調査の結果、標高約40mの高台に繁茂するタケ林を中心とする500m×200mの範囲のタケ林を中心とする一部に生息することがわかりました。この周辺は矢作川のかつての氾濫原で、記録地は氾濫時に遺存的に残ったと考えられる高台にあたります。二〇一九年七月三十日にYouTubeにタケオオツクツクの鳴き声等が投稿されたの

を見つけ、その投稿者である西尾市在住の方に直接聞き、翌八月一日現地に赴き、確認をしました。

タケオオツクツクの体はクマゼミよりやや細長く、♂の腹面は頭部から腹部にかけて白を基調とし、腹部中心線付近は黒色で、♂の腹弁は灰色です(写真1)。それに対して♀の腹面は凹部の一部のみ白色で全体が茶褐色です(写真3)。また、鳴き声が金属音を伴い、これまでに日本では聞かれなかったものであることが最大の特徴で、日没前後の短い時間しか鳴きません。

調査をした八月一日は名古屋の最高気温が36・8℃と酷暑で、現地の夕方まで夕日がまぶしく、汗がほとばしる状況でした。タケオオツクツクは18時30分頃から鳴き始め、金属音を含む特徴のある合唱は19時40分(名古屋市の日没は18時56分)で鳴き止みました。また翌朝二日(ニイゼミ、アブラゼミ、クマゼミは鳴いたものの、タケオオツクツクの鳴き声は聞かれませんでした。さらに八月二日と八月五日の調査時には18時30分頃に鳴き出し、八月五日の鳴き終わりは19時38分(同日日没時間18時53分)で、八月十二日は19時30分頃(同日18時45分)ということも判明しました。これらの確認日はいずれも晴天でし



西尾市



写真3: タケオオツクツク  
♀腹面 (戸田尚希撮影)

たが、鳴き終わり時間はいずれの日も、日没時間から45分前後に鳴き止んでいることから、鳴き止む時間は日没時間との相関が高い事がわかりました。

埼玉県の調査では、モウソウチク林に多数生息していたものが、マダケ林へも広がり定着したことが報告されています。またその後の調査で分布域が拡大しており草加市までも鳴き声が聞かれるようになったそうです。そのことから西尾市でも今後、分布拡大する懸念がありますので、注意深く見ていく必要があります。

それではタケオオツクツクはいったい、いつどこからやってきたのでしょうか？

近年、タケオオツクツクのようにタケを食べたりすみかにしたりするいくつかの外来種が各地で発見されています。タイワンタケクマバチ(タケクマバチ)は、日本産のクマバチと同程度の大きさで、細いタケに直径

8mmほどの穴を開けてそこで子育てや越冬したりすることが知られていますが、二〇〇六年に愛知県豊田市と岐阜県安八町で突然発見されました。その後、随伴タニの形態などから中国本土から移入した可能性があると考えられました。また、ムネアカハラビロカマキリという大型の外来カマキリは、二〇一〇年に発見されましたが、中国から輸入した竹箒(たけしき)に卵鞘が付着していたという報告があります。いずれの種も在来の近縁種をしのぐほどの勢いで各地で繁殖しています。さらにタイワンタケクマバチの発見当時の二〇〇六年、キモンホソバノメイガという、幼虫がタケやササの葉を食べる蛾の一種が豊田市で確認されました。この蛾はそれまで中国で♀が一匹だけが発見されており、豊田市の個体が世界で二番目の記録でした。現在では西尾市史の調査により市内にも分布するようになったことが判明しています。これらの昆虫には、タケオオツクツクと同様にタケに関係する昆虫であること、しかも中国に関係するという共通の特徴があります。タケオオツクツクについては現在西尾市で得られた個体のDNA鑑定を、各地の個体とともに進めておりますので、西尾個体群についてもどこから移入され



写真4: タケオオツクツク  
抜け殻 (戸田尚希撮影)

たかなど、解明されることが期待されます。

タケオオツクツクの幼虫期間が何年かは不明ですが、その幼虫期間や繁殖状況を踏まえると、少なくとも発見した二〇一九年よりかなり前に成虫ないしは幼虫が移入されて定着したことが明らかでしょう。ひよつとしてタケに関係するほかの外来昆虫と同様に二〇〇〇年代中頃までさかのぼる可能性も否定できないと考えます。

成虫の発生時期は七月の終わりから八月中旬頃までと短く、しかも鳴く時間帯が日没前後だけということから、ほかのセミに比べて成虫の確認がしづらい種類ですが、市民の皆さんからも情報をお寄せいただけることを期待しております。

いずれにしましても、タケオオツクツクについてはまだ不明な点が数多く残されております。今後その

ような点について解明しなくてはなりません。

#### 引用文献

(タケオオツクツク関連のみ)

林正美・碓井徹・植村雄一・林田直哉・三好智和(2018)外来種タケオオツクツク2018年調査報告『Cicada25(1): 11-16.』

林正美・碓井徹・植村雄一・林田直哉・三好智和(2019)外来種タケオオツクツク2018年調査報告(続報)『Cicada25(2): 47-51.』

間野隆裕・戸田尚希(2019)愛知県西尾市でタケオオツクツクを確認、佳香蝶71(279): 70.

制作者非公開(2019)YouTube「愛知県で確認されたタケオオツクツク【クソボッチの自由研究】(2019/7/30確認)」

<https://www.youtube.com/watch?v=etPpsU4Kw>.

セミ外来種調査グループ(林正美・碓井徹編(2017)日本から新たに確認された外来種『Cicada24(1): 1-19.』

自然部会

執筆員 間野 隆裕

こちら

美術工芸・

建造物部会で

美術工芸・建造物部会 編集委員

神谷 浩

美術工芸・建造物部会は、二〇一三年春に「別編1 美術工芸・建造物」として刊行する予定で、現在は鋭意調査を進めているところです。

美術工芸部会は、さまざまな専門の委員がいます。彫刻、絵画、工芸に建造物を加え、おおよそ四つの分野に分けられますが、各分野で専門はさらに細分化されます。絵画であれば仏画を中心とした宗教絵画とそれ以外の世俗画に分かれますし、工芸では、漆工芸品や金工品のみならず、陶磁器も含まれ、着物などの染織品もここに入ります。さいわい、近隣の大学や博物館施設にも専門家がおり、必要に応じて応援をお願いしながらすすめています。

合併前の旧西尾地域の文化財調査は、旧市史発刊以後も、愛知県による文化財総合調査や西尾市悉皆調査などがおこなわれており、それ

なりの蓄積がありますので、今回の調査にあたっては、新地域の文化財を特に念入りにおこなうようこうがけています。

新しい発見ももちろんあります。わたしの専門である世俗画の分野で特に注目したいのが、幕末の西尾藩主・松平乗全（一七九四～一八七〇）の創作活動です。すでに岩瀬文庫での「新発見。新知見」新編西尾市史中間報告展Ⅱ」（平成二十九年）でも一部を紹介していますが、幕末の大名には、絵画に秀でた人物が多くおり、諸芸に秀でた松平乗全もそのひとりで、本格的な作品をたくさん残しています。この乗全の作品が、立山にいくつかあるとの情報が寄せられ、立山の麓にある富山県「立山博物館」まで調査にでかけました。立山信仰と結びついた乗全その人の研究は今後に期待したいところですが、その立山曼荼羅四幅対は、とてもお殿様の余技とは思えない緻密な描写を持つ完成度の高いものでした。

美術工芸品の調査にあたっては、写真撮影が必須です。言葉を尽くしても伝えきれないことが写真一枚で伝わることはよくありますし、現状をきちんと記録するためにも非常に有効です。冊子に図版として掲載

する場合には、文化財写真撮影に熟達したプロのカメラマンによる撮影がおこなわれます。掲載の写真は、立山博物館での資料（文書）撮影の様子です。調査にあたる専門の委員と事務局職員に加え、プロのカメラマン部隊も加わった規模の大きな調査でした。今では文化財写真もデジタルカメラを用いますが、非常に高い精度が求められますので、プロ用の大型の機材を使います。ただ、フィルム写真と違ってデジタル撮影は、その場でパソコンで確認しながらできますので安心ではありますが、カメラマンはパソコンも使えなければならぬ時代になりました。

新しいテクノロジーは、デジタルカメラやパソコンだけではなく、彫刻の調査で役立つものにフアイバースコープカメラがあります。細い隙間や壁面内などの様子を確認するためのもので、胃カメラのようなものです。これを使って仏像の内部を観察できることがあるのです。外見からは分からない、内部の様子が分かるのです。墨書があって制作年代や奉納者の名や制作の経緯などがわかったりします。今回の市史の調査の中でも成果が出ています。

こうして、最新の成果をきちんと

お届けできるよう、継続して準備を進めていくとともに、収録できなかった調査資料についても、きちんと将来に引き継がれていくことを期待しています。



## 学童疎開と西尾

近・現代部会 編集委員

岡田 洋司

「アジア太平洋戦争」という言い方を最近はします)での日本軍の劣勢が決定的になつていた一九四四(昭和19)年8月、名古屋市の国民学校(現在の小学校)学童の「集団疎開」が始まり、西尾市域でも集団疎開を受け入れることになりました。そして名古屋市の飯田(北区)・江西(西区)・大井(中区)・豊田(南区)・明治(南区)・大手(港区)の六つの国民学校の学童が、西尾町等の町村に疎開してきました(人数は確定できませんが、千人近かったようです)。子どもたちはお寺に寄宿し、地元の国民学校で授業が行われました。また、戦争末期の東南海地震・三河地震のため、多くの学童が犠牲になったことも記憶し続けなければならぬ出来事でした。

この西尾市域への学童疎開について、旧幡豆町に疎開したことのあつた鏡山文子さんという岩倉市在住の方にお話をうかがうことができました。鏡山さんは、江西国民学校(現



在は合併を経て名古屋市立なごや小学校)初等科の4年生で、疎開したのは一九四四年ではなく、翌45(昭和20)年4月のことでした。

この年になると名古屋も頻繁に爆撃されるようになりました。

学童疎開は、一九四四年8月にはじまつたので、そのときに疎開した子どもたちの動向を軸にとらえられることが多いのですが、実際にはあとから疎開した子どもたちも多かったようです。また江西小学校も最初は吉田町(現在の吉良町)に疎開したのですが、一九四五年1月の三河震災でお寺が倒壊したため、鏡山さんが疎開した同年4月に現在の鳥羽町と西幡豆町へと移っています。鏡山さんが落ち着いたのは、西幡豆の徳林寺でした。

お話の中には今まであまり言われていなかったこと、今まで言われてきたのとはやや違うことがあります。印象に残つたのは次のようなことです。



徳林寺 西尾市西幡豆町

・三河地震で亡くなった8人の合同慰霊祭が江西国民学校で行われた。これは、辛い悲しい体験で今でもよく覚えている。このことはぜひとも伝えておきたいし、伝えてほしい。

・最初は、3年生から6年生の学年ごとに男女別で同じお寺にまゐめられたが、後になると学年をこえた7・8人の班が作られ、数班ずつ各お寺に分けられた。また同じお寺に男女がいた。

・最初、学年ごとにまとめられたとき、ボスのな子どもができ、ほかの子どもたちが「貢物」までするようになった。先生も抑えることができなかった。

・西幡豆の国民学校に通つたが、実際、そこではほとんど授業はなく、勉強はお寺の本堂で自習した。

地元からだけ見てみると地震で亡くなつた子どもたちの慰霊祭のことはあまり意識されないのですが、子どもたちの側から見ると、当然、非常に強い印象をもたらしたものである。記憶されていることがわかります。また疎開生活のあり方は、最初から最後まで同じではなく、状況に応じて変化していったようです。ボスのな子どもがおり、ある種のいじめがあつたというのもしリアルな話です。勉強は、お寺の本堂での自習が中心だったということも意外なお話です。

西尾市域も戦争とは無縁ではありませんでした。戦争について覚えている方々は市内にかなりおられるはずです。『新編西尾市史』では、そうした方々の記憶を書き込みたいと思つていきます。ぜひとも市民の方々のご協力をお願いしたいと思います。

付記…鏡山文子さんへの聴き取りは、平成30年11月26日、岩倉市生涯教育センターで行いました。鏡山さんには、ここであらためてお礼申し上げます。

# 主な活動記録

(平成31年4月～令和2年1月現在)

編さん委員会 5月17日

編集委員会 6月23日・12月8日

「通史編―原始・古代・中世」担当部会長会議  
5月7日・6月23日・9月14日・11月10日

考古部会

●部会

10月14日

●調査

4月

枯木宮貝塚出土資料調査

8月 枯木宮貝塚出土人骨調査  
8月 江尻遺跡出土資料調査  
11月 市内石塔調査

古代・中世部会

「資料編2 古代・中世」の執筆・編集作業

●部会

4月14日(中世)・8月24日(中世)・11月10日(中世)

●調査

4月15・17・22日 東京大学史料編纂所・同総合

図書館にて資料調査

8月24日 吉良・幡豆地区古代史跡

巡見調査

11月9日 佐久島・八ツ面山等古代史跡

巡見調査

近世部会

●部会

6月2日・8月24日・11月3日・令和2年1月18日

●調査

5月12日

5月30日

7月14日

10月4日

善行寺(笹曾根町)

駒澤大学(東京都)

崇福寺(岡崎市)

榑原四郎兵衛家文書(大阪府)

10月10日・11日 川越市立中央図書館



崇福寺での調査のようす

●寄託・寄贈文書整理

4月～12月 のべ72回 杉浦平六家文書(二

色町)、矢嶋家文書(錦城

町)、広瀬家文書(本町)ほか

●翻刻

4月～12月 「旧例集」「近例集」ほか

近・現代部会

●部会

8月11日・9月16日

●調査

4月3日・8月21日 愛知県公文書館

7月30日 東幡豆町鈴喜館・妙善寺

8月16日

専売公社従事者聞き取り調査

8月17日

岡崎市中央図書館

8月17日・23日

名古屋大学図書館

## ●寄託・寄贈文書整理・調査

4月～12月

のべ47回 太田伊八家文書・田

中長嶺資料調査・俳句関係資料・西尾銀行関係資料・稲垣小

左衛門家文書ほか

## ●近代新聞（「新愛知」）調査

4月～11月のべ59回

名古屋市鶴舞中央図書館

## ●自然部会

## ●部会

7月24日

## ●調査

市内の地質・気象・植物・動物（哺乳類・鳥類・爬虫類・両生類・魚類・軟体動物・昆虫・蜘蛛など）

4月のべ18回  
5月のべ19回  
6月のべ26回  
7月のべ19回  
8月のべ31回  
9月のべ12回  
10月のべ22回  
11月のべ15回  
12月のべ27回



自然部会中間報告会のようす

## ●中間報告会

11月24日 岩瀬文庫 参加者30名

「佐久島の地層が堆積したところ」

報告者 内田義和氏・山本康孝氏・吉村曉氏

「西尾市のトンボの現状」報告者 吉田雅澄氏

「西尾市の貝類と化石」報告者 川瀬基弘氏

## ●美術工芸・建造物部会

## ●部会

令和2年1月11日

## ●調査・撮影

6月28日 金蓮寺（吉良町饗庭） 絵画  
7月10日 蓮光寺（鎌谷町） 絵画

8月16日 鈴木丈八商店（肴町） 建造物

8月28日～30日 実相寺（上町） 彫刻

9月26日・27日 富山県「立山博物館」 絵画

10月30日 実相寺（上町） 胎内文書

11月21日 実相寺（上町） 絵画

## ●民俗部会

## ●部会

6月8日・9月7日・12月4日

## ●調査

・西尾城下祭礼「祇園祭」の実態調査

・「茶のあるくらし」実態調査

・シマのくらし調査まとめ（漁業・祭礼・絵馬）

・屋敷神・イットウ・トナリ・ジルイ等の

実態調査

・ムラ組織の実態調査

・漁業関連調査

・絵馬基礎調査

・民具調査

・弘法信仰・秋葉信仰・庚申信仰・白山信仰・

地藏信仰・薬師信仰等

・クネ田・ドブ田・ウ田と農具

その他、市内の祭礼調査や聞き取り調査等

4月～12月のべ330回

調査にご協力いただいた皆さま、  
情報をお寄せいただいた方々へ  
心より感謝を申し上げます。

# 『新編西尾市史 資料編1 考古』 刊行記念行事

## ①西尾市岩瀬文庫特別展「考古遺物の美と謎」

考古学の世界をより身近に感じていただくために、『市史』に収載された遺物のなかから「美」と「謎」をテーマに優品を選び展示しました。展示品には「八王子貝塚出土の注口土器」（徳川美術館所蔵）など市外所蔵の資料も展示しました。

会 期 7月6日～10月6日  
会 場 西尾市岩瀬文庫 2階企画展示室  
展示解説 7月6日・8月24日

## ②パネル展「写真から見た西尾市の発掘のあゆみ」

『市史』編集過程で発見された調査風景写真を用いて、西尾市の発掘のあゆみを写真パネルとリーフレットで紹介しました。

会 期 7月30日～8月18日  
会 場 西尾市岩瀬文庫 1階ギャラリー

## ③西尾市史講座 全4回

執筆者による『市史』の成果報告を行いました。

### 第1回 「西尾市史の新知見」

第1部 「西尾市史の魅どころ」

浅岡優（西尾市教育委員会）

第2部「西尾市内の出土人骨からみた縄文・弥生時代人」

茂原信生氏（京都大学名誉教授）

### 第2回 「弥生時代の西尾」

第1部 「三河に稲作が伝わった頃」

黒澤浩氏（南山大学教授）

第2部 「弥生時代集落をみつめる」

鈴木とよ江（西尾市教育委員会）

### 第3回 「中世の城館と村」

第1部 「幡豆郡における中世の村」

鈴木正貴氏（愛知県埋蔵文化財センター）

第2部 「伝えられた幡豆郡の城館―お城再発見―」

奥田敏春氏（岡崎市文化財保護審議会委員）

### 第4回 「古墳時代の西尾」

第1部 「百舌鳥・古市古墳群と西尾の古墳」

三田敦司（西尾市教育委員会）

第2部「海と古墳―佐久島の古墳を中心に―」

西島庸介氏（安城市役所）

会 場 第1～3回 西尾市岩瀬文庫地階研修ホール  
第4回 一色町公民館コンベンションホール

## ④西尾市史シンポジウム「縄文時代の西尾」

東海地方を代表する縄文時代の貝塚である枯木宮貝塚を中心とした報告を行いました。

日 時 8月3日

会 場 西尾市文化会館小ホール

・「市史編さんと文化財保護」

加藤安信氏（西尾市史編集委員）

・「墓制からみた枯木宮貝塚」

山田康弘氏（国立歴史民俗博物館教授）

・「生業からみた枯木宮貝塚」

川添和暁氏（愛知県埋蔵文化財センター）

## ⑤西尾市資料館企画展「にしおのいせき」

市内遺跡から見つかった多彩な約300点の遺

物を展示しました。

会 期 9月14日～10月20日

会 場 西尾市資料館

## ⑥一色学びの館企画展「古墳時代の西尾」

古墳出土資料を一堂に展示しました。

会 期 11月2日～1月5日

会 場 一色学びの館 多目的室

展示解説 11月23日

## ⑦古墳探検ツアー

愛知こどもの国内に所在する4基の古墳と矢六石を学芸員が案内しました。

日 時 11月16日

場 所 愛知こどもの国



岩瀬文庫特別展のようす



## 刊行物のご案内

いずれも岩瀬文庫休憩室でお求めください

刊行予定

### 『新編西尾市史研究』第六号

A4判 令和二年四月上旬刊行予定

ただいま編集集中！

市史編さんの過程の調査・研究の成果をいち早くご紹介します。

(内容)「古代参河国関係史料再考―播豆(幡豆)郡を中心に―」「三河実相寺所蔵 一条経通御教書について―東福寺大檀那による長老職補任と九条流―」「堯雲寺記の復元とその内容の一考察」「吉良家日記」関連史料の翻刻と紹介―その二―「アジア・太平洋戦争下における海洋道場の建設―愛知県を事例に―」「西尾市で採集したミジンコ類」「伝承の姿・形―鳥羽の火祭りを例にして―」

既刊

### 『新編西尾市史研究』第五号

A4判 90頁 500円

既刊

### 『新編西尾市史研究』第四号

A4判 120頁 700円

既刊

### 『新編西尾市史研究』第三号

A4判 110頁 700円

既刊

### 『新編西尾市史研究』第二号

A4判 76頁 500円

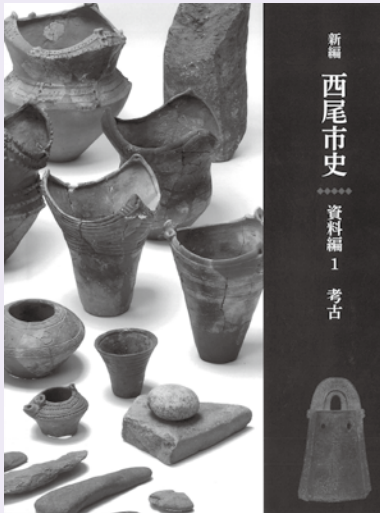
好評頒布中

### 『新編西尾市史 資料編1 考古』

頒布中の『新編西尾市史 資料編1 考古』では、縄文時代から近世まで373か所の遺跡と出土遺物を収載しています。市資料館、岩瀬文庫休憩室などでお早めにお求めください。

A4判 790頁

西尾市の遺跡位置図付 5,000円



資料や情報をお待ちしています。

西尾の歴史や文化、風土に関する資料がありましたら、お知らせください。今後の市史編さん活動に役立てます。

- ・古文書や古い日記など
- ・戦前の市内で刊行された雑誌

自然調査にご協力ください。

(1) 市内のヒキガエル・イモリ・タケクマバチ・セアカゴケグモ・フクロウ・アオバズク・化石などに関する情報を集めています。詳細は市ホームページをご覧ください。(http://www.city.nishio.aichi.jp/index.cfm/8,50452,91,674.html)

(2) 魚類について、川・海を問わず珍しいものを見かけた場合は市史執筆員が所属する碧南海浜水族館(〇五六六―四八―三七六一)まで情報をお寄せください。

担当・お問い合わせ

西尾市教育委員会文化振興課市史編さん室  
〒四四五―〇八四七  
西尾市亀沢町四八〇 西尾市岩瀬文庫内  
TEL 〇五六三―五六―六六六〇  
FAX 〇五六三―五六―二七七八  
E-mail shishi@city.nishio.lg.jp

新編西尾市史だより第六号

令和2年2月1日発行